京都大学若手人材海外派遣事業　ジョン万プログラム（職員派遣）
令和６年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研　修　者	職　　名	主任
	氏　　名	佐藤　拓也
研修先等	渡　航　先　国　名	タイ
	研　修　先　機　関　名	京都大学 ASEAN 拠点
	研　　修　　期　　間	令和 6 年 4 月 5 日～令和 7 年 9 月 28 日
具体的な研修内容	本研修プログラムを通じて、約１年半の間、本学 ASEAN 拠点にて拠点運営を始めとする国際的な業務に携わり、本学の国際化の推進や発展に活用できる知識や経験を積む機会を得た。ASEAN 拠点では、１．戦略的国際共同研究の支援　２．国際教育関係事業の支援　３．国際ネットワーク形成･基盤強化　４．国際危機管理という４つのミッションを掲げており、これらのミッションに基づく業務は多岐に渡るため、それぞれのミッションに関連する具体的な業務の一例を以下に記載する。 １．戦略的国際共同研究の支援 ◇ASEAN 地域を中心とした国際共同プロジェクト関連 実務としては、例えばタイ・マヒドン大学で開催された On-site Laboratory ワークショップの運営補助を行うなど、関連する海外でのシンポジウムやワークショップにて、さまざまな経験を積むことができた。なかでも、JASTIP (Japan-ASEAN Science, Technology and Innovation Platform) や JAIF（日・ASEAN 統合基金）プロジェクトに関連して、ASEAN 拠点所長や URA のインドネシア出張に随行し、ジャカルタにおいて開催された、第１４回日 ASEAN 科学技術協力委員会（AJCCST-14）に出席する経験を得られたことが印象的であった。本出張では拠点所長らの用務が滞りなく遂行されるように配慮しながら、主に会議等の記録作成や写真撮影などの補助業務に携わった。これらを通して、教員が海外にて学会参加や研究活動等を行う際、本学の旅費の規程やルール等が実情に則しているのか教員側の目線に立って見る経験になったとともに、海外にて開催される国際会議の工夫点（事務面）等を学ぶ機会となった。また、ERIA (Economic Research Institute for ASEAN and East Asia)のような国際機関の訪問にも同行し、海外にて新たなネットワークを構築するためのノウハウ等にも触れられる機会となった。	

（第１４回日 ASEAN 科学技術協力委員会の様子　撮影：BRIN）

（ERIA 訪問の様子）

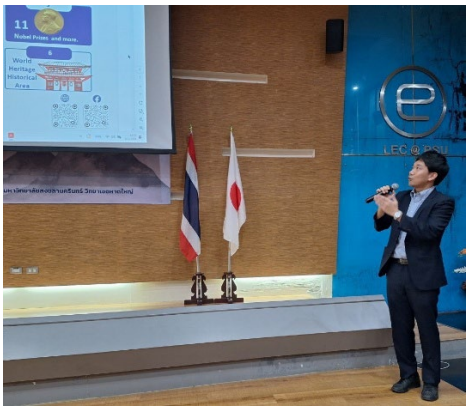
２．国際教育関係事業の支援

◇留学生リクルート活動の実施支援関連

タイの大学等にて開催される留学イベントに本学のブースを出展し、来訪者の質問等への対応を行い、また、タイの高校等を訪問して、本学に関する情報や本学への留学関連情報の紹介を行った。特に、例年１～３月頃に開催される、在タイ日本国大使館主催の地方留学フェアへの参加では、普段はあまり訪れる機会の少ないタイの地方都市（ソンクラー、ピサヌローク、ウボンラチャタニ、コンケーンなど）にて、現地の学生と交流をする機会があり、タイの地方に住む学生たちも日本の文化等に興味を持ち、日本語学習に熱心に取り組んでいる姿が印象的であった。また、タイの地方に住む日本人の数は少なく、地方の学生にとって学習した日本語を実際に活用できる機会は少ないため、意識的に日本語でコミュニケーションを取ることを心がけながら学生の対応を行った。自身の対応が学生の将来の進路決定等に僅かながらでも良い影響を与え得る業務であるとともに、海外

の学生の日本や日本語に対する人気や興味・関心等の現状を肌で感じられる経験であった。これらの学生対応や留学情報の紹介を行うことで、本学の留学制度や留学プログラムに関する理解が深まり、知識や経験を増やす機会となった。

（本学出展ブース）



（本学のプレゼンテーション）

３．国際ネットワーク形成・基盤強化

◇東南アジアネットワークフォーラム開催支援関連

２０２４年１２月にタイ・バンコクにて、２０２５年２月にはフィリピン・ロスバニョスにて開催された東南アジアネットワークフォーラムの開催補助を行った。特に１２月にタイで開催したフォーラムの後には ASEAN 拠点１０周年記念式典を開催したため、フォーラムや式典の会場となるホテルの選定から始まり、当日の受付等の運営補助に至るまで、現地タイ人職員や URA と協力しながら業務を進める必要があった。また、フォーラム等に係る費用の精算や会場の下見・契約手続き等、日本ではあまり経験することのない業務に携わることができた。

（ASEAN 拠点１０周年記念式典の様子）

４．国際危機管理

本研修期間中には、タイとカンボジアの国境付近にて軍事衝突が起きただけでなく、２０２５年３月にミャンマーにて発生した大きな地震により、タイの高層ビルが倒壊するなど、予期せぬ事態や災害等への対応が求められた。現地からタイムリーに状況等を大学本部と共有し、現地にいる教員や学生等の安全が確保されるよう、情報の収集や提供を行うことが重要な役割の一つであった。

（ミャンマー地震発生後の様子。ビルから退避した人が歩道にあふれ、交通も麻痺している。）

◇拠点運営業務関連

ここまで記載してきたASEAN拠点のミッションに関連する業務とあわせて、定常業務として経理・総務面等からもASEAN拠点の運営業務を行った。

経理業務では、出納責任者として現金（タイバーツ）の管理を行い、オフィスの賃料支払いやオフィス用品の購入等、日々の支払い関連実務を行った。また、現地の会計コンサル会社とも連携して、支払後の会計書類・伝票等の処理・作成と経理報告業務を行った。

四半期毎には必要経費の算出をして本部に拠点運営経費（仮払金）の送金依頼の手続きを行った。

また、拠点のコピー機保守契約やサーバー保守関連等の契約手続きを行い、契約書の取り交わし等の実務を行った。

総務関連の業務では、出張後の報告や現地タイ人職員の出張に係る航空券・宿泊先の手配等といった実務を行った。

また、ASEAN 拠点のホームページを更新するなど、広報関連の実務を行

	った。
本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック	本研修を通じて、本学の国際化には教員と職員とのさらなる連携・協力が重要であると感じた。本研修に参加する以前は、普段の業務において、どちらかというと教員との直接的な関わりは少ないほうであると感じていた。すなわち、教員についてあまり良く理解していなかった。しかし、ASEAN 拠点での業務を通して、現地に来られる先生方とお会いする機会に恵まれただけでなく、ざっくばらんに色々なことをお話しさせていただくことができた。先生方からお聞きするお話は大変面白く興味深いものばかりで、研究や教育、大学の国際化について、当然ではあるが非常に熱意を持って取り組まれているということを改めて実感した。このように、相手のことを良く知らないまま、日々の業務を行っていると、所謂事務的な対応・仕事に陥ってしまうのではないかと感じたため、教員と職員との垣根を作ることの無いよう、職員側も意識して取り組むことが重要ではないかと感じた。文化や習慣等が異なる海外にて業務を行った経験から、まず重要だと感じたのが、やはり相手を知り、相手のことを良く理解するということであり、このような意識は今後も持ち続けながら業務を行い、教員と職員が一丸となって本学の国際化に取り組む意識を共有していきたい。また、海外の大学や研究者との連携は、これまで本学の先生方が培っていた所謂「人脈」によって成り立っていることを目の当たりにした。このような人脈をより強固なものにできるよう、自身の経験等を周りに積極的に伝えて、職員の国際化を推進していくことができれば幸いである。 （チェンマイ大学訪問） （カセサート大学訪問） また、人脈という観点から、ASEAN 拠点での業務を通じて、タイにオフィスを持つ日本の他大学・機関関係者らとの繋がりが生まれたことが、私にとって今回の研修における一番大きな財産の一つであると感じる。現地での繋がりを通じて得られた他大学等の動向や取り組み等から、本学にも取り入れられるようなものは積極的に活用を検討できれば本学の国際化

	にもつながるはずであり、また、今回得られた繋がりは今後も大切にして、他機関等とも一緒に国際化を推進していくことができればと感じた。具体的には、本学学生のインターンシップ受入先として、海外にオフィスを持つ機関等をより積極的に活用すれば、学生だけでなく双方にとってもメリットが期待できる可能性があり、また、本学職員の海外研修として、海外の機関等と連携して海外での実務経験を提供する機会を設けるなど、今回得られた繋がりをさらに発展させ、大学の国際化に活用できるような制度制定につなげることができれば幸いである。 （現地で出会った大学等の関係者） 約１年半に渡り ASEAN 拠点に派遣いただき、拠点運営業務に携わったことで、自身の滞在費も含め ASEAN 拠点の運営・維持にどのくらいの予算が必要なのかを身を持って体感し、ここで得られた経験は少しずつでも今後の大学の発展のために還元していきたいと感じた。帰国をした後も、ASEAN 拠点のさらなる発展を願いながら、職員の国際化に貢献していきたい。末筆ながら、本研修の機会を与えてくださった関係者の皆さま、研修期間中に支えてくださった皆さまには大変感謝しており、私もいつか恩返しができるような職員になりたいと思う。